

スイングジャーナル誌の読者のリクエスト曲を演奏したドリーム・セッション

ジャズの真髄を知りつくしたベテランたちが中心になって、ファンのリクエスト曲を演奏したアルバムだから、まさに夢のアルバムだ。
ほくも大きな期待を寄せて聴いたが、「イツ・マジック」の演奏が始まったとたんに、ぞくぞくと身震いするほどの感激を味わった。これこそジャズに求めつづけてきた演奏だったからだ。
気負ったり、突っ張ったりしない、こけおどしの演奏をしないスコット・ハミルトン（テナー）、ケン・ペプロフスキー（テナー、クラリネット）、エディ・ヒギンズ（ピアノ）というジャズのエッセンスを大切にするプレイヤーが3人寄れば、こんなにもすてきな演奏が生まれるということなのだ。
ゆったりと、美しい旋律を持ったスタンダード・ナンバーを心に歌を持って、存分に歌い上げる。これが3人の基本的な姿勢である。どこかげだるく、英語でいえばレイジーな気分の演奏だが、これぞジャスの本質なのだ。
かつての名テナー、レスター・ヤング、デクスター・ゴードン、ソニー・ロリンズ（ある時期まで）もみんなそうだった。スコット、ケン、そしてエディの3人にはすでにこの王者の貴禄と雰囲気が備わっている。
黒人英語やジャズ・スラングでは、ルーズとかレイジー、イーズ（ゆったりすること）、イージーなどはいい意味に用いられており、ジャズでは最高の境地とされるものなのだ。
スコット、ケン、エディの3人は白人だが、黒人のジャズメンたちが生み出したジャズの真髄を完全に体得しており、こうあって欲しいと思う演奏を繰り広げてくれるのだ。

それでいて、決して後ろ向きではなく、テナー・サクスの音は2人とも太く、たくましいし、男の色気を感じさせ、生命の躍動するものを持っており、感覚にも“いま”を感じさせる。

また、このアルバムの魅力はホーンが2人いることだ。ジャズの面白さとスリルのひとつにインタープレイがあるが、同楽器である2人のテナーが相互に刺激しあい、高めあってプレイしているので、全体の演奏にこの上ないスリルが生まれるのだ。
また、ケン・ペプロフスキーが時にクラリネットを吹くことによって、演奏に変化が生まれ、アクセントがつくのである。そのいい例が、本アルバムで2回演奏されている「枯葉」である。これはファンのリクエスト投票で1位になった曲だが、「枯葉1」では2テナーで、そして「枯葉2」ではスコットがテナーを吹き、ケンがクラリネットを吹く。すると「枯葉1」とはまったく違った軽やかな雰囲気生まれ、「枯葉」を2度楽しむことができた。

スコット・ハミルトンは、すでに長年にわたって名テナーとして定評のあるところだが、ケン・ペプロフスキーはこれまで、実力の割には地味な存在であった。しかし、ヴィーナス・レコードにリーダー・アルバムを吹き込んでから大きく花を開いた。これまでどちらかといえばクラリネット奏者と思われていた彼から、テナー・サクス奏者としての大きな素質を引き出してみせたプロデューサー原哲夫氏の功績は大きいと思う。
本アルバムでの堂々たるテナー・プレイを聴けば、誰もがスコット・ハミルトンに比肩する存在になりつつあることを認めるのではなからうか。このアルバムによって、魅力的な2テナーのコンビが誕生したとっていいのではなからうか。

この2人のホーンに対するエディ・ヒギンズのピアノに関しては感心するところしきりである。2人のホーン奏者を支え、すてきなクッションを提供しているだけでなく、しっかりと自分の持ち味を出しきっており、彼のスインギーなピアノによって、バランスのとれた演奏になっている。メンバーの中では最年長であり、1932年の生まれ。このヒギンズを中心にしたリズム・セクションの心地よいリズムとビートも賞讃したい。
ドラムスのベン・ライリーは大ベテランで1933年の生まれ。セロニアス・モンク・コンボでの活躍で知られてきたが、

It's Magic イッツ・マジック Eddie Higgins Quintet ~ Featuring Scott Hamilton & Ken Peplowski エディ・ヒギンズ & スコット・ハミルトン & ケン・ペプロフスキー

- イツ・マジック** It's Magic 〈J. Styne〉(7:40)
- ゴースト・オブ・ア・チャンス** Ghost Of A Chance 〈V. Young〉(6:49)
- アイ・ゴット・イット・バッド** I Got It Bad (And That Ain't Good) 〈D. Ellington〉(5:10)
- ムード・インディゴ** Mood Indigo 〈D. Ellington〉(5:38)
- アイ・ネヴァー・ニュー** I Never Knew 〈Ted Fio Rito & G.Kahn〉(5:28)
- パークリー・スクエアのナイチンゲール** A Nightingale Sang In Berkley Square 〈M. Sherwin〉(7:00)
- 枯葉 I** Autumn Leaves I 〈J. Kosma〉(5:11)
- アイル・ネヴァー・ビー・ザ・セイム** I'll Never Be The Same 〈M. Matt & F. Signorelli〉(8:44)
- ザ・タッチ・オブ・ユア・リップス** The Touch Of Your Lips 〈R. Noble〉(6:25)

10. 枯葉 II Autumn Leaves II 〈J. Kosma〉(5:26)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins 〈piano〉
スコット・ハミルトン Scott Hamilton 〈tenor Sax〉
ケン・ペプロフスキー Ken Peplowski 〈tenor Sax & clarinet〉
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart 〈bass〉
ベン・ライリー Ben Riley 〈drums〉

録音：2006年10月18日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

ほくは10年ほど前にニューヨークのジャズ・バー“ブラッドリーズ”で彼のプレイを聴き、そのスポンテニアスで、沸き立つようなリズムにすっかりいい気分になったことがあり、それ以来アート・テイラーとともに最も好きなドラマーとなったが、アート亡きあとも注目していた。このアルバムで聴けるとはとても幸せだが、センスのいいドラミングは相変わらずだ。ベースのジェイ・レオンハートは1940年生まれで、このセッションでは3番目の年長者である。線の太い音で、いつもよく歌うベースを弾くので、身を任せて聴ける心地よさがある。このエディを中心としたリズム・セクションは、いまや最も信頼できるリズム・セクションとっていいのではなからうか。

スコット・ハミルトンは1954年生まれ、そしてケン・ペプロフスキーが1959年の生まれで一番若いが、ホーンの2人は成熟した大人の風格があり、こちらが期待する通りのフレーズとアドリブで応えてくれるから、もうなにもいうことはない。スコットはデビューしたでの1973年頃からずっとライブもレコードも聴いてきたが、年を追って成長し、表現の幅も広げてきており、いつも安心して聴けるテナーの一人だ。そして、ケン・ペプロフスキーというライバルを得たので、この2人はますます楽しみになってきた。

ところで、このアルバムはスイングジャーナル誌上で、50曲の候補曲の中から一人が2曲ずつ選んで投票した結果、上位25曲の中に入った曲から9曲を選んで演奏したものである。

なお、投票の結果1位になったのは「枯葉」だった。やっぱりそうかと思うほど日本人の好きな曲だ。アルバムのタイトル曲「イツ・マジック」がベスト10入りし、9位にランクされているのがうれしい。
こういうポップ曲のジャズ化はとても新鮮で、アルバム中、一、二を争う演奏となっている。また、デューク・エリントンの名曲「ムード・インディゴ」がベスト4に入っているのは、ファンのジャズに対する見識を示しているといえるだろう。

曲目と演奏について
1曲目の「イツ・マジック」はアルバム・タイトル曲であり、投票で9位に選ばれている。
いわずと知れたドリス・デイによるヒット曲で、1948年の映画「洋上のロマンス」の主題歌であり、ジュール・スタインの作曲。
ゆったりした大海原のようなバラード演奏で、最高ですね。
ほくは惚れ込んで何度も繰り返し聴いた。最初のテナー・ソロがスコットで、次のテナー・ソロがケンである。

「ゴースト・オブ・ア・チャンス」もジャズには欠かせないスタンダードであり、バラードだ。投票では12位に入った。この熱しかった果物のような味わいの演奏で、スコットがテナーを吹き、ケンがクラリネットを吹く。2人の呼吸のあった競演こそ、まさにジャズの醍醐味だ。ケンのプレイでクラリネットの魅力を再認識する人も多いことだろう。

ここからデューク・エリントンの曲が2曲続く。「アイ・ガット・イット・バッド」は歌手がよく歌う。ほくは昔、メアリー・アン・マッコールの歌で聴いて好きになった。再び2テナーで、スコットが先行し、2番のソロがケン。エリントンの曲らしいアンニュイな気分で演奏していて最高だ。エディのピアノのフォローがいい。「ムード・インディゴ」ではテナーとクラリネットの合奏がエリントン・サウンドを出しているのが心憎い。この急がない、頑張らない気分とフィーリングがジャズなのだ。前者は投票で16位に、後者は投票で4位に入った。ケンのクラリネットがエリントン・ムードを高める役を果たしている。

「アイ・ネヴァー・ニュー」はテンポを上げてスインギーに演奏し、テナー・ソロはスコットが先行し、ケンが後でソロをとる。アーネスト・Ｒ・ボールの作曲であり、投票では24位に入った曲である。最高に心地よくスイングする。

「パークリー・スクエアのナイティンゲール」は歌の曲として有名で、ほくは最初アニタ・オデイの歌で好きになった。作曲したのはマニング・シャーウィン。哀愁感のある旋律が印象的であり、投票では8位と、上位に入った。スコットのテナーのあと、再びケンが柔らかな音でクラリネットを吹く。

「枯葉」はやはりこのアルバムのハイライトだ。投票でも堂々の第1位である。「枯葉1」は2テナーで、スインギーに、たくましい音で、勢いよく演奏される。短いがドラム・ソロでベン・ライリーの粋なプレイが証明される。

「アイル・ネバー・ビー・ザ・セイム」は1932年の古い曲で、ジャズメンのマッティ・マルネックとフランク・シニョレが書いた曲。洗いがいい曲だ。投票では21位に入った。スコットがゆったりしたテナーを吹き、ケンが明るくクリアーな音で輝かしいプレイをみせる。そして、エディが終始さわやかにピアノを弾く。演奏する姿が見えるようなプレイとは、このことだろう。

「ザ・タッチ・オブ・ユア・リップス」はイギリスのバンド・リーダー、レイ・ノーブルの曲だ。彼には「ザ・ベリー・ソート・オブ・ユー」という佳曲もある。投票では19位に入った。再び2テナーの演奏で、最初がスコットで2番手のソロがケンである。軽くスイングする演奏によって、2テナーのスリルが存分に味わえる。2人はスタイルに共通するところはあっても、音色やフレーズが異なり、それぞれ自分の個性をキープしている。ここでもドラムとの掛け合いで、ベン・ライリーの切れ味のよさに注目してほしい。

「枯葉2」はケンがクラリネットを吹き、「枯葉1」とはまったく趣の違った演奏になっているので、再度「枯葉」を新鮮な気分で聴くことができる。1位の曲を2度演奏するというのも粋な試みだ。この2つの「枯葉」は力強く、各人のソロも大いにのっており、長く名演として残るのではなからうか。

（岩浪洋三）